里見八犬傳

第八輯

巻六

へ13
709
44

曲亭馬琴今著

八犬傳

東京名山閣版

明治三十八年十月九日購求
第八輯
遺13 709 44

八犬傳第八輯巻第五附録 獣部

江戸麻布長坂のわたりのまみ穴といふ名さる地名なれば知ざるものなし。沾凉が江戸砂子ハ。雌狸穴と書う。雌狸をマミとのふ義ハ何に據るか。貝原益軒の大和本草ハ。貉をマミと也。篤信云マミ。ミタヌキトモ云。野豬ニ似小ナリ。形肥テ脂多ク。味ヨクシテ野豬ノ如シ肉ヤワラカ也。穴居ス其四足ノ指各五恰如人手指。獵師穴ヲフスベテ捕之。行クコト遲シ。獾ハ貉の類ナリ。狗ニ似タリ。並ニ穴居スといフ。又本草綱目五十一獸之二。獾の下ハ。稲若水和名を剰入くマミとも。李時珍云。貉猪獾也。獾狗獾也。二種相似。而畧殊。狗獾似小狗尖啄矮足短尾深毛褐色皮可為裘領といフ。かまども和名をマミとのふ獸ハ。孟軒若水の二老翁一ハ貉をマミと訓。一ハ獾をマミと讀ゼ。訛ハよりて訛を傳ふ。世俗の稱呼ハ従ふべの欲。今按るハ獾ハ和名鈔ニ載ゼ。貉ハ和名ミヲ。和名鈔毛群部

猯の下ハ引。唐韻云猯音端。又音旦。和名美。似豕而肥者也。本草云。一名獾
猯。歡也音。といふ。獨野必大本朝食鑑ハ和名鈔ニ引く。猯をミと讀へり。必
大云。猯頭類狸。狀似小狐。體肥行遲。短足短尾尖啄。褐色常穴
居。時出竊瓜果而食。本邦處處山野有。之人多不食。惟言能治
水病。予昔略見。狀然未試之。則難辨。といふ。もはらの諸説を參考
るハ近来世俗のミとのふ獸ハ。ミを訛るハ似たり。是則猯と又田舍兒とを
ミタヌキとのふその面の狸ハ似たるゆへ唱へるゝね故ニ或ハマミと
いひ。或ハミタヌキとのふるゆゑ。ゝ。麻布ゆゑ。ゝ。猯の棲ゝる餘波
ゆゑ。遽莫。猯ハ大獸ハ。ゝ。その穴ありとも。地方の名ハ呼べくもあらぬ。
且猯とミタヌキと唱ふ本つ所ゝ。是その頭の狸ハ似れど又猯をマミと唱ふ據
とゝろ。何とゝゝ猯ハ真偽の二種ゆゑ因く再案ゆゑ。麻布ゆゑ。ゝ。穴ゝ

元来猯のゆゑ。ゝ。鼯鼠ゝ。ゝ。鼯鼠ハ和名モミ。一名ハムサ
ビと和名鈔。鼯鼠の下ハ引。本草云。鼯鼠上音カ水反。一名鼯鼠和名
無美。俗云ケンメー。佐比。兼名苑注云。狀如猨而肉翼似蝙蝠能從高而下不
能從下而上常食火烟聲如小兒者也。かゝるゝ鼯鼠の和名ハ毛美ゆゑ
とゝ。ゝ。むさびとのゝ唱ふるゆゑ歌ゆゑモミとゝ。ゝ。萬葉集第三
むさびハ木ねまのもとゝ。ゝ。引の山のさつをハひかけるゝとゝ。ゝ。ゝ。
いも古言ハヨく田舍ハ送るそのゝ。ゝ。昔東國ゆゑ鼯鼠をさくのみとゝ。
ゝ。その證ハ今も日光山の頭ハて鼯鼠の老大ゆゑのをモモンガアといふ。モモンハモミの
訛りゝグワアハそぶ鳴ゝ声ゆゑ。ゝ。さてゝの鼯鼠を下野ゆゑ。ゝ。ゝ。と唱へ武藏ゝてゝ
まみとのゝゆゑ。ゝ。ゝ。ゝ。麻布長坂のほとりゆゑ人家もゆゑ樹立ゆゑ
呑もいと間ゆゑ比ハ鼯鼠ゝの栖ゝ處ゝ故ゝまゝ穴の名の遺ゝゆゑ今も世人の

憂邦婦德
心猿美
芟侫老消
憑駿才
雕
喬
河鯉權佐守如
くろとさんのすけ
鱗目前
あるめのまへ

雨をまとふけものの
雲をはりもとりもの魔魅のまろこと
秀
笠
冠松鬼四郎
魔魅の化鳥鞘坊
まがのかるのせんぼう

貓兒可愛
木天蓼柯刀
犬子驚看匹夫
欺黠豪
永堪世智介
穂北小才二
石海屋
嗚呼善性

仁田山晋五
五十子
善惡平
乃
遠く

小児を權まふ。あそくまりん舍とわといふ之鼯鼠の形ハいとも〱。なるべきものなるべしまみ穴の名の高きをけるも宜なり。○今ハこの是等によりてなぶべし縱その穴は鼯鼠などの棲るにあらずともいとおそるべき穴なるを士俗これをとく穴とも又訛りてまみ穴とも呼なしたるにやあらんかし。まみ即ち猯ハ則魘魅にも通ひて是おそるべきの義也 ○今もおそるべきものをまみといふのみ。八方言なり狹知らねども考る所なり。○安永七年の夏両國橋の頭にて觀せる千年猯。然るを若水の獾をまみと和訓せしは猯と獾と似たるものにて共に穴居を做ものなれバ猯の和名をミといふに對へて獾をまみといふなるべし

なるべきまみのまいりのにて猯をまみの義なるべし又愚說の鼯鼠ハ鼠類之穴居する物なればとふとも怕るべきの義に憑らバその名ありとすべからずとにもかくにも麻布なるまみ穴を真名に書バ鼯鼠に作りて怕るべきの義となるべし當なるべし江戶の地名を誌せるものにかゝりの差ずるなれば送憾のるなるもの抑本輯第七卷にまみ穴のことあれバ此に愚考を附録して下帙の引に代るのミ

天保三年壬辰夏五月中浣

蓑笠漁隱識

吶ハ清人の俗語小說に多く用るあり此聴字の俗省なり字書にあり正字通吶字の注に見えたり

南總里見八犬傳第八輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第八十回 得失地を易て勇士厄に遇ふ 片袖禍を稔して賢女獨知る

復說犬村大角ハ犬飼現八共侶に出ひかけ来く莊客們が推捕稠て繫んとせしを。あな何事ぞとむろに驚れながら些も怯まず齊一声と喚立て人々疎忽の所行をなせそ俺們ハ是旅人也素より怨もなきものを認錯せバ後悔あらんといふを聞かず倶に闘くそが中に先に找そ一兩なる名持す棒を突立て佗と疾視て冷笑ひ。噫咄偷児の悍々なるくも這期に及びて分說听んや窩𤨩若們が竊たる衣箱ハ其首にあり遂に免まじ天罰なりしとおもふて快く綁縛の索に被らバ這幸なり呵責の苦痛をまぬかれん然ぞハ目にもの見せんぞと勢ひ猛く罵れども然しも騎也二犬士の面魂の逞しげなるに腰に插る両刀さへ

本支の程を料り難て左右をくゝみ食打も蒐らぎ。捕稠るのを見れば既ふと使ひを
ゆる。大角い徐ろふ又衆人からも對ひて人々大く譟ぎる。俺らをよしと空ねか。俺も亦向の
程穂北頭の驟雨よ逐れて連の走り。折背ふ走る行裏を盗児を搔攫れて趕
ち這里ふ来よければ。そぶ支黨とおぼ。死癖者這衣箱ふ尻を拽て堤の上ふ憩てをり。
登時此彼両個の賊ふ近つく俺身を寄せ。推並び力を勤ゑ且く挑戦ひ。矢
庭よ蹴倒ー投伏せ立び撲ゑんと刀の柄ふ手を拽ー勢ふ怕惑ひ共侶ふ。そぶ俺
河へ滾落て泅ぎて前岸へ逃亡ふ。小るふかの折俺ら行裏ふ憶ふ。河へ蹴落せ
欲又盗児ら搔攫ひ。のと見る欲あ。ひ。そ迹よ残るふ俺東西ふ。這衣箱のを
ふ。とふ亦現ふも衆人よりも對ひて各々あれを听ー欲俺ふ聊足を傷ふ。後れふ
ければ那期ふあふ。支果て這里へ来よければ送恨ふかふ。ー。熟思ふ這衣箱も
那盗児们ら遠ふ。里人の家ふ。ふ。穏取てを来ふけ。車ふやふけ。卸ふ後

ー火家を俟ふ欲是も亦知ふ。ー主を忘れて返さぬやと俺も思ふ俺友も心ふ。
惻隱の誠ふ然ーも浅ふ。現俺ら東西を。穏れも人の東西を喪ひ。その情等ー。
ふ。快近邨ふ赴て。と報て主ふ。ふ。商量の折ふ果ーを違ふ。
各々も亦那盗児を趕て来ふ事情を既を推量ふ。情由ふ。听ふ。俺们を疑ふ
ふ甲舎児の思ひ足ふ。所以ふ。恁ふ言語を。聴れ。是非及ば
ぎ武士ふのら盗賊の濡衣を被せ。阿容々を甲支野人の縛を受ぶ。俺们
二名死を。大刀折れ勢ひ究ふ。ー。疑ふ
然ふ況農夫野老の才ふ十名十五名。撲倒ふ易ふ。可惜命を隕ふ。
疑念を霊弃を這衣箱を。去ば俺们ら。望む所を迷ひを取ふ必死を覿
面一人ふも恙ふ。還ふ思ふ。然ふ。挑む狡ふ。敦圉懲を勇士の奮激
刀の瑾甘ぜ寄ふ。殺ふ。睨ふ。気色を憚る壮佼们。口隱を齊一

わとべ
後方とえくれば逢ー找め那口車ふらち奔せられて逃去。と弱冒推こ三隊の壮佼ども執念
くなや
深冒岳めくのこ爭ひ果ーまりけるそが中ふ一両名ちる貌ののれわそ罵り已ぬ壮佼们ど推鎮め
さそや
耳ふ紀く退ぐるこ三反だろ大家其首ま立聚ひ額と集めと商議の折々這方とるもあり頷
くもあり笑もあり既ま商議ー果ま毀計荘客二名だるも衆人ま立別れて穂北のこへ走
ぴけり登時壮佼们を鎮めま件の荘客一両名堤の下ま找ま来ち三大士ふち對ひて微笑
ぐらふ要と屈めそ刀祢達ちさ者のべか理も非も分ぬ壮佼们が宜ようを必ちま太くま礼を
佳ぬと勸解れが現ハ大角ハ共侶ま斃頭で命べ汝達俺们がひつまりと信ぶれて急疑ひを
釋れ狡と問かされてさいその衣箱とりて来ま盗児の吉又の趣宜ふりとを疑ふて又云云と
いふ中あーねどいふせんその衣箱ハ小可们が衣裳ふあーぶ是東人の東西ま那盗児们が何の
間ふ狡駝搭て逃ぶーと趕ども及ばでまを空うせば術もま一那盗児と捕捉ぎーと懲ふ七の皮
箱とのこ令ぬそ還らべ東人が俺们をこ疑べられ願ふハ刀祢達ふ小可们と倶ふ東人の宿

所ふ到りそ那盗児の為体と面前ふ説知ーめぐ初よりー七小可们が竊ぎりと會得せられ
ん這義と某ーるひかーと憑むと現ハうち笑てそハちる意味もあるべー什麼汝達の東人の
宿所ハ這里より遠くまや原是豪家狡村長狡役類ヨりくあるぐら自ら昼ま賊の入るも知
らぬ是ものの東西と窃盗ーハ故ある三狡甚麻ぎと再問べさいふ小可们が東人の穂北梅
田柳原這三郷ま名もまる氷垣残三百反行と喚做を御士でふ七内儀ハ昼襲ふ世とまりて
家ふハ重戸と喚做る只一箇の女児あり三稔ぐりさ比落鮎餘之七有種とふ壮佼を
女婿ふ田園の業と任用ー七その身ハ宿所ま在る甲斐ふ今朝ーも背門ま積藏の品の
入り七ぐ空ー七空ー穴と塞げそ僮僕们ふ吟味て内ま東西と食ぬさー七修復ふ時て
穆りーかべ生平より後れ呑飯と皆たらべんと思ひて跡ハ心つけ合くて平妻時庖厨ま退り
折と硯ふ盗児が背門ふ忍ぶ潜び入そ出ー措ま衣箱と駝ともんとせー程ま一個の小廝が
厠ふ立ぬ立ぬとそ盗児あり。と叫びーべ盗児ハ這声ふ驚きて衣箱とそ伏其首ふ

うち捐て。慌たゞけん背門へ走り出て。庭を遶りつゝ枸橘の藩籬を潜りて逃亡る程しもあらせず。人も喧も咸庵濕より走り来て容子を問へば。盗児は逃去て東西も取られず。折から猛可に降る雨に出せし東西を濡さじとて。手に手に拾げて積藏へ納れば。衣箱の五箇なりしに四箇ありて一箇は足らざりけり。原来件の盗児は一人ならず。支黨ありて他より先に入りし奴が。手に一箇の衣箱を背に着て逃亡りけん。然とは知らで由断しつ。聊時の後れしとも遠くは逃じと罵譟ぐ闔宅の折擇主も家頼も血眼になりて。詮議を做程に田園に出なる農奴們の那驟雨に稲外を濡つゝ今来ければ。主人は迭に招聚へよしと示し。部を定めて一隊を竹塚。一隊は梅田柳原。又小可們は千住の方を投て這首まで走る。憑は情由ではへば那盗児を捕捉して衣箱をとりぞ。東人に疑れて。外より来る賊あらば古文の紛れに小可們が窃稿て手々滾と折小斷まれて。忽地に穿鑿成しくなりし。縡憑々と誘へて馳て返走つるならん。と思はれもせば身の與歩なり。小可們が東人は年老たれども心ざまのよき男悍くして武藝あり。

且その皮箱に斂られしは尋常男女の衣裳にあらず。鐵羅維短衣肱甲臑盾皆是秘藏の武器なれば。一皮箱でも重價なり。うちみるよりも重ければ那盗児が得堪ずしてうち卸して隠しけん。憑まで具に告まゐらするは。旅客く刀禰を推留めて宿所へ伴ひまゐらする縡皆自他の與なるを。まうらぬ事のみこそ既に是等の趣を注進の與に莊客を三名宿所へ還しつ。さるにても詞かへしたる長談を稍々果し。現八は大角をみかへりて。犬村ありぬかと謂しを。這輩の所望の一條餘なし。情由はあらねども大角へへ。大角點頭て。現那程にはいへるを推辨は後暗きに似たる素より急がぬ旅なるに。非如十町二十町立戻るとも厭ふに足らず。と應て駈て理會の莊客們に打對ひて。那盗児の意を汲て。那盗児を認りしは便是俺のみ。俺が大奪れし行東衣は今も復さるぞ。人の東西を奪ひ去るぞうへに後走る各々の證人に憑ころは寔に烏許の所約なれども。前路を急ぐ旅なれば。左も右もものならぬ這衣箱を主人の東西と正可にいへる證據もあらな。什麼汝達は從類秋その名も吟まれしけれども問れて。數は兩個の莊客迭に見合せて宜

趣理り。それ商賈の衣箱ゐ漆繪ある抗羽の蝶ハ迺氷垣ゐ家の花號紛れあるべうもあらず又小可ハ名と世智介と喝るゐ却東人ハ這ら頭ゐ大々ゐ威德あり。これゐより奴婢ハ皆その氣寄ら嶮稀ゐ當所中奥開發の大財主ゐ噫盈ゐ虚々とヨヌ辨ゐ時の移りぬべ誘ゐ安内と仕んとゐ後方をゐ食快来ゐ刀祢遣の美引せゐ〜そよと喝べ大家応と答て堤の下ゐ找ゐ来ち己前の無礼を陪話るゐ然らゐも俱ゐ笑げゐ立並びるゐ中ゐ逞べ多ゐ一個の壯佼堤ゐ登りて二大士ゐ揖讓をして衣箱を楚と駝搭て立程ゐ大角ゐ現ハゐ俱ゐ徐ゐ下立け。登時世智介小オ二ハ衆人を二大士の前後左右ゐ從ゐ氷垣の宿所〈安内と走る。連ゐ路をゐそぐけ。恁而現ハ大角ハ穂北の荘ゐ来て問べ這里ハ字を椽野と喝做る一邑ゐ。巷路を左へ一町ばかり。引入れる有底坊ゐ一座の荘院あり。則是氷垣殘三夏約の居宅ゐ。但それゐ松柏の老ゐ幾株欲敷ゐ枝る南向ゐ苛めゐ黒く畏高ゐ

ゐ衡門を扉廣ゐ推建る。左右ゐハ拘橘の樹墻を折逆ゐ。内ゐ書院ゐ近る茅檐の樹柱の間ゐ。其ハ頭ハ安定ゐ。門邊より七十間ゐ這這方ゐ流ゐ細小川ゐ。搆斬ゐ取做て。席薦二枚許る。古石碑の長ゐ。そゐ低橋ゐ渡ゐ中ハ絶ゐ。龍田の秋ゐ。水上遠く吹風ゐ丹楓流れて濃薄ゐ波濤のゐ。べの綾錦たり。ちく走ゐ。食る。鳥ハ一隻ゐ鶺鴒尚乃者や渡りけ。雲井迥ゐ落ゐ来ゐ。榎実群食む椋鳥ゐ鶉鶉ゐち雑り。喋ぐ下枝ゐ樹梟ゐ。出来秋ゐ。豊饒る。三ゐ狼毎ゐ餘りあれべ。飽て匍匐ゐ門の狗。夕辰作る鷄と共ゐ雌を喝ぶ鴿ゐ。富ゐ集る本邑の長者ゐ。ゐ。精しる。現ハと大角ハ。前門より找ゐ入り。ゐ。世智介ハ這方へとて玄関より請ゐ登せゐ。母屋の外面ゐち逆ゐ。と。庭の折戸をゐち敲げば内より一個の若黨出てゐ。世智老僕ゐあゐ。と。問ハ答て世智介ハ那盗覓を趕走らゐ。皮箱を呑ゐ歩ゐ。旅人逆を待て来ゐ。快開てよとのゐ。其応と回てゐ。俟ゐ找ゐ近着ゐ。鎖を抜ゐ。誘とゐ。二大士ゐ。揖

譲と云て先に立て書院のかたへ案内とも當下世智介小太二人に銭名の荘客も咸二天士の後に跟て俱に庭に入りぬ。程ゝ現八大角(又若黨に案内をせられて雑貨庫の後なる樹柱深く細路を推續ぬ。程ゝ程に男女も少けき共侶に大地を禹斜と踏破りて吐嗟と叫ぶ程もあるに呀然として仰反ぬ。坎窪に陥りしと後方に立る衆人に獲られじと走り寄る中にも魁を爭ふ壯佼のこゝに件の穴に跳入り折重て現八と大角をそれ生擒と細紐を吊して推抗るに上る衆人受合てこゝに俟撞と推居る登時現八大角に怒れる声を揚て蓬ぬる荘客に鄙言を巧にして賺しこの這首へ誘引へ這等の計較ある故欺偽を知へ愚人の本性賊に堕るに非義非法今ゆゝに又若们に道理を述んへ益に仇ぐる主人を吸ぶ。對面して市虎の疑惑を言下に解んと快喚まと敦圍て立まくるに牽然る壯佼们の後方より小太二人世智介と共侶に我寄て現八と大角を左右見て冷笑ひて這盗見们がそのさまに男ぬ。俺東人に對面を願へと。誰ら怕れて執継ぐに縦あらく欲せども先面前へ牽居に躍て敷るまでに頃を昏んとする覚期極めて念佛でも唱て俟と窘れば世智介いとゞ荒く。意氣揚々と二天士に對し髯撫捫てやよ盗見们本支と知れるに然ば末期の念を存ふ這昇さあが名に恥ぬ智慧を揮ひて衆人を鎮めて首尾よく計り課せ。辞のよ段を説ふに。郷高に俺们ヨリ勢るりしも身に寸鐵を帯るものなく捍棒農具のみ若们二名の両刀に拠と取ると見るに毛を吹て疵を求んとの哄まと如ど。とは思へそれ鳩鬼とを知りて陽に羨しく宿所へ人を走らせ却東人は辞の由と計畧の趣を報知に禀せるに這里あるに准備の造措まて坎阱に近屬倉廩の修復ふに這頭の壊と穿取られる迹を尽まるに思起せ俺妙計穴の上に薄板を並べて壊と掩させられ辞立地に成就して重く骨を折までもなく岩の隨に這個穴に陥れて生拘りに現若们が打扮に旅なく武士に似れども出没不測の盗見とを支黨のある郷高に窃を衣箱と傍に措くるに怯まで穴に瞞めと欲するかの折の挙動物ゝ

さる両悪鬼の外物に似げなき大胆不敵なりと怖るゝ癖者ならんあるやと罵るを大家急に推禁めて
世智刀祢和主の挿なきを擒捕る盗児をそ談義は要なし東人の寝刃磨して俟ものは快
牽立てあらんやと只に世智介領して寔に然也快せよといひつゝ立て沓共侶に庭の假山うち廻りて
二大士を書院なる縁頬近く牽居けり然ども現八大角は深く怖て氣色なく左ても右ても
這衆人に理を演虚実を辨ずるに炭氷合ねばなかく複愚の惑ひは解がたし主人の對面
せん折を俟んずものをと思ひてる心はあれど勇士の窮阨黙然として争はず大川大田が去歳の
夏那庄貝の別館にて力士に擒捕もてられしも係ありけんと後に知る此彼寃屈の郷縛縄孔子も
陽虎に似ざりせば陳蔡の阨あるべからず白龍魚服をせざるもあらば余且の網に入らざらんに梅
蕾春に魁てば雪霜且これを痛めぞ後に徴妙の香あり豪傑はまづ時を得ざれば造物連
阨に遇て終に一世の功名あり看官下まで讀も果さざる庄貝の一段に似たりとおのれも
あらん歟とぞ作者の自注を下ものを水滸西遊にまへし重復と異なるを知る人は知るべし間話

林題却説當家の主人と唱えし氷垣残三夏行は郷高に盗児を捕捉よとて従僕農民此
彼と有く許我の人を部して四方へ出して趕せしに千住の川に赴きたる世智介と小才二が火家の
壯佼二名をもて内通によりてうちを洩れば猛可に坎穽を造らして今かくと俟程に世智介們を両
個の賊と欺詐りつ倶して来て計りしごとく件の穴へ陥して擒捕るよしをもて若黨らが報しゝを
聞てうち鳴らし雀躍あへる這夏行はよるとしの齢も既に長濱の七瀬過ても生憎に不風
流の立騒ぎ乱して世とて哀人夜武勇の悪鬼人に捉れて最も逞しかりければ肚裏に思ふやう俺知ぬ
四下の盗児も怕れて徘徊するとあらんと心寛せし由断は大敵あらも昔日天白日に潜入て東西を竊
として其奴們を今斬て吾先おもは何までいの後を懲さんはあ此贖なる新刃を錆すよ究竟なる東
西を獲なしと狼びて準備をしつ等程に老僕世智介小才二は合て復しする衣笛箱を一個の壯佼に
うち駝して衆人と共侶に大飼犬村二勇士に鹿縄被て牽立来つ先衣笛箱を縁頬まうち卸
さして声高やかに大老父爺すて由き欣許りしごとく盗児を擒捕ていざや出させ給へと喚りける登時

八犬傳八輯卷五
あも戸
ろう山化
夏彩怒
二犬士を斬
んとも
小才二
大角
せち介
現八

主人夏行は嚮に折戸を開たる。那若黨黒某甲に斬柄拵たる刀を持して縁頬近く出て来ぬ。
現八と大角は瞬もせず熟視に、最堅固なる老人也。皎々たる頭の毛相は枯野の小草に統ねし
如く、骨立たる松の膚は深山にある朽木に似たり。赭石なす面の色、三旦星を欺く眼の光り、歯は猶
仁に似て一枚もおちず。脱ぎ腰は梓の弓なれど猶反るべくもあらざりし。身は段々筋を深く傲たる仁田
山紬の厚綿斂たる衣を被て、繻組の圓帯を胸高に結びたる上に、煤竹色なる道服を下短
に被領しける。その為体田舎備て、鳥なき嶋の蝙蝠殺羽織は、まだ世にも冑毛を絢と組
糸に管をして串たる片襷斜に掛て苛めしけれ。武弁と氣質の起居も是なく、四下を睨て立たる大家敬
ひ跪く。その中に世智介小才二両個の老僕は笑しげに頭を擡げ膝を拢めて、大老父御覧せよ。
竊去られし衣箱は千住堤の頭にて合復しけり。又這両個の盗児を稍宿所まで誑引て
穽に掛て生拘るまでの計の趣は、嚮に注進の為まゐらせたる壯佼们が口状にて大概知らせまゐらせけめ。
搦捕たる盗児们は則これでぞ。とのいひて傍をみかへれば、百夏紛屎髮頭て、□□□僮たる若佼们がげある

掙ぬいと愛たし。俺本邑に卜居まで地をたがへ農を勸め、穂北梅田柳原の三郷を再興せしより
既にして四十餘年。上に領主なく下に叛く民もなけれど、今戦国の沿習にて耕すものも刀を跨へ
耘るものも戟を携へ、畎畝に妻子を養ふものも皆是武藝に疎からず。就中俺三郷は人の心一
致して、勇敢なるは義を守り、質朴なるは足る事を知れるを以て、争ひなく夜は鎖ねども盗賊入らず、路に
遺を拾はず。併俺武勇の致す所と遠近人に羨れたるに、近属河より這方に
盗賊あり、徘徊すと告るものあり。しかれども擒鬼ならんと思ひしに、その言果して違ざりし。一人ならず
俺宿所を賊の土足に汚されて、剰武器を竊れては名実是より衰へて、鄰郷人に侮られん。世に
安からぬ事なれば、彼此へそと部して趕せしものから、吉左右を獨倹不樂ざりけるに、西北南三方へ遣し
たるは、いまだ還らず。然るを東へ出たる世智介小才二隊の才覚によりて逸速く、身剛かるべき両
賊を誑引よせて生拘りたる大功賞するに餘りあり。見るに其奴们両名の面魂は悪棍めかれど、打
扮も亦異様ならねど、則是外視を欺く老賊の致す所。出処姓名旧悪まで招道させて

頭殷ま落さん程に死処に牽居よ快々せよと性急る武男が誇る倚老の決断兼ねて壯客
們又立かりて二犬士と牽分んとすれども現くも大角も立る侭は動れず噫戻かや世智介が
才二身と起し来て二犬士を推退けと左右より找むと雖も引外を現八と大角いかし合さねど
勇士の奮激足を飛して礙と蹴る蹴られて世智介小才二六苦と一声叫びもあへず此彼
齊一身と轉して二間ばかり左右なる庭樹の幹に投着られて腰を折か腕を傷り苦痛は
堪ねど蠢動くのみ早まい起もあぐまけ本支が懲りたる衆人が古を掉首を注して重て近寄
くのもなく取る手を放さで呉ぐりが阿客々々と四下を囲み戍ぐる登時現八大角を
佐と夏行ふち對人で和殿が當家は主人よりその姓名い衆人の告誇るがより少知りて蔵
麥ぐの辨とる兎蒙昧愚痴の僕徒が謀て俺們を疑ふのあるとも辞の虚実を問糾
さで俺們とあて不良の人とせるるが是甚麼な道理を知ぎ具が説示さん膝を找めくよく
所ね俺們も亦盗児が行裏と奪れるもの故が箇様々々と告るを夏行少肯も奴ま原

声に為り立て噫盗児們ぞ悍々なるも筋なる虚談を正しけがの瞞めと欲はるとも其頭を
壯佼們が注進がより俺も亦總て送ぐ少知ら今ゆ詞を巧がして懸河の辯が儘ま原
とも証人なければ誰が信ん今その口を鉗ぎ兎正に證拠ぐふあり天罰ぎ思ひ考ぐぎと血馬り
ぐ遽く懐を探捞りて出ぎ襦衫の片袖を引伸し又合抗て兎を盗児とれと欲ぐを
胆の淺るまでが駭ぎ悔く衆人是等の吉が衆人の知ぐべければ説示さん皆共信が
所ねか鬱が這盗児們ぞ小厮が捏れく逃し折慌ぐるけ枸橘の樹墻を推破りて潜り出
んとせし程が襦衫の袖を枸橘の下枝が縫れて引断離りとぞ侭が逃亡る迹が送り
這片袖を俺が出せば驟雨の天霽齋耳りし此るとぞ必其奴們が襦衫の片袖なるのあ
らん衆人必ずぞと問へば大家さんが剛才這奴們両人を捆る折初てとる左が立る盗児の
襦衫が断離れく片袖なり。あるも此彼相似る浅茅木綿でひとふを大角が入へりく人々
知ざる所あり俺這襦衫の片袖を喪ひつるが堤を両個の賊を捕へんとて挑て折まり引断

離られしが。風に吹れて川へや落けん。索もしかども、あらざりしと共も果ば夏行は呵々とうち笑ひて
係まで證据分明なるに、なほ爭ふは無慙の癖者。骨も拗て招道さん。跪ぎは毆倒せん。意
を寛しと敦圉けども、既に懲りたる衆人は、兼もあらぬと答るのみ。又近づかば蹴られやせん。棒もて足を
拂んと欲せしてやよけん。右せん欲とて困じて進を難しかば、夏行は焦燥て、ふかひもなき弱虫們が
寡の知もある両個の賊に、今から怕るゝはあらずや。諺に保輔張梁にも捉る勇あり術ありと
ても童索拭く綱めこれは檻の獣に異ならぬ。俺ぜんやうとぞ、やとて後方に侍る若黨に持せ
刀を撫合て勢ひ猛く縁頬より走下んとせし程に、なほかけたる屏風の背に竊聞せる女子あり。
忽地に声をかけて、やよ等の家尊の大人、言んべき事のはべるなり。と喚禁めはて
遽しく屏風の端を撥遣りて見れば、出しは別人ならず、このある年招婿して落鮎餘之七有種に
妻せたると聞えたる主人残二夏行が獨女兒の重戸なり。當下重戸は縁頬に跪きて父に對
ひて喃、爺々公係言にさぶらはぬ淡れ女子の身の程をしも忘れなまくに舌長しとぞ叱らせ給ふ歟知ら

ど、いはれど盗賊詮議の御声の高かりしに、胸安からねば端近う出て、已前より那里にぞ、一五一十を
聞もきつ。まうさんかたに出へば疑ひなれども、侍らざ人の心の好々は相貌によく見るものなるに。
擒捕られし旅人達へのゝひざる人柄さへ竊盗とせべきものに似ざり。勿論離れし襦袢の袖の
這里に残りてあるは、左ても右ても動きなき綷の證に似たれども、那人々も提ゆて提惆さらし盗
兒の為に引れて片袖を喪ふまじきとならんが、実古ならせば那身に黄縁なき足禍鬼の所為なる
歟をよくも知らで只管に惴りてあらん身に、かけあらば最惜むべきのみにして後悔其首に立がたから。是
なるの虚実を糾さべき證人は外ならぬ綷の初に盗児を見出せし小廝の還るを俟て那人々を
みせあらば、墻を潜りて逃亡る盗賊は那旅人欲別人なる欲立地にあらん疑ひを解給ふべき捷径に
てぞはべるめれ。既に這義をかふとのぞ、禁まゐらせずは名も知らぬ那人達の與のうちならば罪疑し
かるものを殺させその子孫の世まで祟を受るとのことの物に本ゆもはらざや。賢慮を旋しあそばせかし
と理りを演義を推て獨惑の賢女の諫言耳に逆へど、夏行は然しも恩愛父女の情腹も

得て諾ひもせず。只冷笑ひて憐むまじきものをしも慰むるは是婦人の仁にぞ。随ふ做まくならば雖言に刃を借すに似たり。世の胡慮にならんのみ。墻を潜りし盗児を認し小廝なる手吉へ。他は南へ遣しつる一隊の追捕と倶に。未だかへらねど還るを俟てんとするは易けれど。正真なる證据の片袖あるを齎来て今はいらぬにぞ。二十に足らぬ小猴子の一言隻句を取るしもあらんや。朝の炊代に窮する宮寡或は夜の脩短の費を厭ふよし云云といふ。それ相応しからぬ。家傍痛き女子の裁判益なき意見は聆く耳あらず。快々立ねと窘るを。重戸は身にも推返して然るぞに思召ずも力及ずとありしが。餘之で刀袮も今まで還らず。況やけふは母刀自の忌日なりしを。あな憤りて紛れて忘れあひし。狭からで罷まで呵責を禁めて。那侭繋措けるが。遂に虚実の安定を知らまくて。御後悔あるべくもなれぞ。這誼は一入願しけるを。允させぬへとうち陪話く。浮世の秋を身に占る。脆き涙の夕露や。茨が下の女郎花。なよらで直く怜悧さを側聞する二犬士は憶ず目と目を對するまでに窃に感じて。十室の邑にも忠信ありといひけり。○されば小の悍なる嫁貞行も言の道理に迫られて。沈吟ずる已半晌許なりし。稍くに領きて。やよ重戸。汝趣意に由ありて日属萬古文を任しゝは有種もいまだ還らず。且亡者の命日忌辰に非如罪人なりとても殺すは要なき所紀るべし。然れば你の願ひに儘して。翌まで一室に閉籠措ん。涙脆きも折にこそよるめり。そを泣くな狭と慰めて。外面見かへり。あなれ衆人に迄るよしを吩てこ。その盗児们を那里なる金樹室に閉籠て繫しく鎖して。一両名逞代にうち戍き。又那奴们が両刀と只一箇なる包裹は重戸且く預り措て。有種がかへりなばよしと告てんせよかし。倘毫もろうも憐愍を被るおて俺女児におゐらば然ることあらば。仇とおもふん衆人も懲さてなるで。なに日ゆるぞ。其頭にき事を做し果なば。今共侶に奥へ来よ。賞禄に酒を飲せん。太に義我々々と労ひて。引提し刀を若黨に持して奥へ退るに。若黨も亦身を起して。主の後に従ひける。介程に衆人は二犬士の両刀と裹を重戸に遞与もあり。又縁頼なる衣笥を積藏に斂るもあり。這餘の壯佼ばら各名欲おそるゝ索合を縮て。二犬士を牽退るに現八と大角は既に重戸が心操の世に

捉れ〜と雲霞の感ぜと。胸膈豁け怒氣理の奮雷勇初の伏ぎ〜〜〜〜倶の時運と天の儘〜と慫
ても再爭ふ。牽ち〜隨ふ。連立て。盆樹室の赴くを人餞送るを中の世智介と小才二八。
撲傷の堪ぎ。捍棒と杖の衝て足引の山あり水あり庭ぐ。三十歩の程を〜も人ゐ
笑ひとけ。ぐ〜千町を過る心地ぎ。と咳ぎ面を醜めて怨〜げを辿りけ。

第八十四回

夜泊の孤舟暗の窮士と資く
逆旅の小集妙の郷豪と懲を

秋の日ゐれば短くて。ぞや黄氏昔の隨の奥の吹播めく衆僕の醼會。主翁と一席ぐも。
恩賞免許の不無ると今這折の喫ぎもあ〜べ何の時を期ぎぞと。迭の挑む献酬の沙
量の浮れて高笑ひて酒菜と暴ぎ猫脚の折布空〜ぐ〜ぐの吹畫〜と又咳笞きへ
暇ぐ〜けり。然ば重戸の折と沒て獨奥より出て来る四下と屡ぐ〜ぐ。推ぐ〜秋色と
且書院の縁頰の戸袋の推隱と外面を声潛ぎの夢介壁藏其首ぐ〜快

快ぎと。喝立れば。盆樹室の頭の土居ぐ張番ぐ〜両個の小厮の応と答て共伴の遽〜く
出て来ぐ〜重戸の招に近つけて。ぞの夢介の壁藏の你二名の盃とるまでも含ぐの沙量ぐれ。
巣衞の せ〜れ〜徒然の堪ぎ東西の欲〜ぐ〜りけ。然とて奥ぐ〜酒宴の最中ぐれ誰もかも。
代ぐ〜ぐる人ゐ。這里の那里と首馳と遠くもあ〜の程ぐれ俺身の這里よりぐ〜ぐ〜ぐ
く庵温の赴ぐ〜。夕飯たべ〜ぐ来よか〜。とのれて扮ぶ夢介壁藏合笑ぐ〜ぐを棲ぐ〜ぐ
乖に御心操仰ぎ悖ぐべ〜ねど倘大老爺の知られぐ〜ぐ閑と叱られん影護に
這支のことのと重戸の多あぐ其頭の遠慮ぐ〜ぐ
鉗ぐ〜ぐ〜ぐ好もぐに這身の〜ぐ〜ぐ。俺身の口を
夢介壁藏狀ぐが仰ぐ後ひ〜ぐ〜ぐ。ぐ〜ぐ宜く〜ぐ〜ぐ。と急ぐ。ぐ〜ぐ
半遣りつ戸袋ぐ。狀包と掻合ぐ抱ぐ。閃りと下ぐ縁頰ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ
潛ぐ〜ぐ盆樹室ぐ近着て帶の間ぐ隱ぐ〜ぐ鍵と取ぐ〜ぐ戸と推開ぐ恭ぐ〜ぐ〜ぐ

声を密めて文言ふれば詳に告ちあらはす暇もなく鄙の奴家が父親に[illegible]るゝを[illegible]
ぬ八けん窮に出て見たまひ[illegible]ん身達の両刀と行裏い這里にあり快く出させ給ひ[illegible]と[illegible]天
主の縛の索を解捨まへ敬[illegible]なり現八犬角ヨク[illegible]賢女の慈善に感じ且躊躇て
言語齊一答るまう[illegible]れたん[illegible]の明察俺們を那賊るゝと知られて放遣ふとも主人を
はゝ衆人の至明の醉の醒ぬもあらんそのゆゑ[illegible]て身を隠さば何の日ゆゑ恥辱を雪んかくの
如く武士[illegible]るの最も恥[illegible]るれば今はゝ教に従ふ[illegible]這義を猜ーゆひよと推辭むを
重戸は彼あへて宜ふ[illegible]然るとゝ[illegible]慾に道と守りて死を待ゆへ疎鹵るべ[illegible]恁ゆゑ奴家
さ[illegible]に疑ふ似れども非如ん身に悪支ゆとも奪去られ衣箱を[illegible]復ーれば這里に損
る[illegible]然るを執念深頑に斬んとのひ父よりも良人を心ゆゑ悍から今ゆもあれ[illegible]来とよりを安
内より突殺ちて背門より出て見[illegible]奴家は又這室を鎖して髪を[illegible]乱倒まく人の
来ぬると侯んこれより親も良人も皆うち駭て走り聚ひく喚活てと問ひ奴家則
詭りて室を成りゝ小厮們は夕飯をたらべさせんと[illegible]よりて乖妻時の程奴家が代りて縁頼
より那里を目成て[illegible]ーゆ那旅人們は術やありけん室の内ゆ縛の索を解捨壁を
毀て出て這方へ来ければ奴家は吐嗟と駭て人を喚んと身を起す程ーもあらぬ色近
つゝ推禁んとせ折ゆ胷を撲れて縁頼より落て黒白も知らぬ[illegible]ゆ件の旅人
們は嚮る奴家が次の間に措る力と行裏を探食て逃亡ー狄黄昏時の[illegible]ゆゑ奥ゆ

[illegible]ゆ[illegible]の折[illegible]を疑ひ解て俱に先非を悔ひ[illegible]這義を[illegible]ゆ[illegible]て悟る現
八大角共伯は歎賞ー七通微妙玄賢女の教誨いと[illegible]趣皆理あり遊莫教に従ひて
俺們這里を出て[illegible]ゆ外ん身のうへ及ん身を殺ーて仁を做ー義侠あり[illegible]とも俺們心ゆ
これを忍んやとのゆゑ重戸は推返ーて[illegible]の[illegible]も豫て思念あり願ふゆゑ身達這室の壁を
内より突毀ちて背門より出て見[illegible]奴家は又這室を鎖ーて髪を[illegible]乱倒まく人の
来ぬると侯んこれより親も良人も皆うち駭て走り聚ひく喚活てと問ひ奴家則
詭りて室を成りゝ小厮們は夕飯をたらべさせんと[illegible]よりて乖妻時の程奴家が代りて縁頼
より那里を目成て[illegible]ーゆ那旅人們は術やありけん室の内ゆ縛の索を解捨壁を
毀て出て這方へ来ければ奴家は吐嗟と駭て人を喚んと身を起す程ーもあらぬ色近
つゝ推禁んとせ折ゆ胷を撲れて縁頼より落て黒白も知らぬ[illegible]ゆ件の旅人
們は嚮る奴家が次の間に措る力と行裏を探食て逃亡ー狄黄昏時の[illegible]ゆゑ奥ゆ

酒宮女庵福の音に淡に暇ある折あれば今まで人の知ざるもありけん危ぶるであるよといはざ
必実古又にせられく奴家は外面める陰し。快く壁をと急し云り。女子に稀なる思慮才幹に
現八も大角も、いと感じて推辞に由なく、然らばその意に任せんとて、袱包をうち開きてとりいだ
せる両刀を腰に佩るぞ中に現八は行裏を駝ひて四下を見かへるに盆樹を擔に杁
あり是究竟と合点抗て力を極めて室の壁を突摧くと三尺ばかり又大角も倶にて縋よく
擁へられければ共に里戸ようち對ひて再生の恩知己の義を演る間も辞別猶豫しく人な
し知られじと患心のいそがれて詞短き秋の日も暮て隈なき月影は潜ぶに便り蘆垣の蔭に
添ひて出ゆくを里戸は霎時目送りて後そく室の戸引よせて鎖しをして縁頬に頭近
く帰り来て鬂撥乱し櫛笄を捨て地上に臥てをり当下里戸はおもふやうかかれば家尊の
大人は勇悍を旨とするのみ人の虚実を猜まることの思慮足らでもし有らん縫襦衫の
片袖の此彼似たるとありとて那人達が真の盗児なるべしや倘亦真の盗児なりとも

奪去られし衣箱の旧の侭を複りしかば只その罪を罵懲して追放ちみなば慈悲ある
人といはれんに諫めて用ひられずは己とぞなる忠胆太く女子に似げなき計ひは罪怕るべきことならず
亡母刀自の命日に必死の人を両箇まで救ひて追薦冥福のよすがにならんとて夢に奇しき
教のありけるを日属の気質に憚りて只で親さへ良人さへ欺くまでの不正古又えさもたゞ今
曾にのま思ひつづけて弥陀唱名の持念を凝す夕間朧庭の千種に鳴く虫の音枕に
濕冷に瘡發りてよべとなる郷間は夕飯まゐるべくとも云ひ誘で退けるる夢介壁蔵両個
小厮のかへり来るを今やおそしと思ひけり。話分両頭。介程に大飼現八犬村大角
両個の勇士は賢女里戸が惻隠忠恕の資助によりて必死を免れ氷垣が宿所の背
門造より窃に走去りたれども遽に己とどまる所ある武士ものの本意にあらざれ
へ従に耳えくいふて文那盗児の往方を索め生拘りて奉て這里に帰来て主僕の
ひを解きもあらば何の日にか恥を雪ん今宵は千住に宿を投めて商議をきべければ連

ずよ路次といそがてそ夜いまだ五鼓まるに程なし千住の河邊ゆきまよはれいとまく前岸へ渡さ
んとそ屢船を喚れども夜川い渡さでけるゆえ這方の岸ゆい船もなく答はのみなりき
まい俱よ堤ふうち登りて彼此と見亘せよ一町ばかりの河上ゆ苫葺の船ありけれい走りて其
首ゆ赴いて船を寄せよと喚るに水際近く艤繋たる船のもゆ人存らねば寂寞たり
答もなきに心いとく焦燥る現八を遽しく大角をうながして這里も管領師處なれこそ猶豫
せい水垣ゆ沿ひ勢をねて趕ゆきまるとありしかせい命ゆ難義ゆ及べり俺那船ゆ乗穏りて漕
寄とそ和殿と俱よ渡さえ水際よ找ゆきそうせとのよ大角領ゆて考へ思べと答へかゆ現
八を腰刀ゆ而ゆと横ゆ身を跳らし七岸と離れて歌うたる船ゆ閃りと乗穏りそ笠高ゆ抜
んとすー程よ船苫の内よ人ありて盗見等と喚林ゆそ苫椎抗ゆ猛然と見れば一個の
暴男走出そ現八の利ゆを下と扼るとあるゆうと身を淪しと振拂ゆこ角ゆ入る程も
あるべ又一人左のうとり衝と出ゆ組んと找ゆ左右の棹ゆ這方の岸ゆ大角ゆうち見て

驚く再度の窮厄いそ力と大飼ゆ勢ゆそ仇と拉んと思ふもかひなゆ陸と水浅瀬と索く
彼此と走入ゆまくあれども不知案内ゆ夜川の深浅測難く村胆の心ゆうへ惴るのみ
よるべの便ゆうけゆ介程よ現八を敵と左右ゆ引受て熟得の巻法術と盡せば揺ぬく
船よ水入りて辷る板子と踏留め且く挑爭ふ折ゆ乘妾時隱れて又豈取雲ゆ拂ゆて出る秋の
月の清光夜水と照しそへ金波流れて細鱗跳ゆ氷輪激瀬ゆ倩りそへ玉兎競ゆて晩
潮落ゆ金天変化瞬間ゆ隈ゆくなりー月光よ三人ゆ面と仕ゆとそて共よ駭く声も齋
一句　和殿ゆ犬飼　句　現八ゆ　句　然へ道節ゆ信乃ゆ
句　あらくゆふと呆るまそゆ捉ゆ捕られゆと解ゆて組と縺ゆ糾糸ゆ結び義と憑
ゆ長紀別と今ゆ環ゆあらゆる迭ゆ狡ひ比んゆも南麻與民の甲斐ある世とそ思ひけ登時
現八ゆ先ゆ為ゆ思ひけゆ今ゆ官の再會ゆ兄ゆ原是何ゆの故ゆ孤舟の内よ来ーゆ侯人ありそ
狡甚麼ゆと問へ道節微笑て不古俺ゆ這船よ乗ゆあり一ゆ後れて来ゆ人と侯ゆ

文溪堂藏

文溪堂藏

與(くみ)なハあらじ。這等(これら)の事ハ姑(しばら)く置(おき)て和殿(わどの)ハ亦(また)何等(なにら)の故(ゆゑ)に岸(きし)を離(はなれ)て繫(つな)ぎし船(ふね)まいと慌(あはて)しく蜚(とび)乗(の)りたるか。ろ給ぐ然るにそと回復(ふりかへ)されてかきハよけれしも不慮(ふりよ)の大厄(だいやく)あり辛(から)く必死(ひつし)を免(まぬが)れて這河邊(このかはべ)まで来(き)つれども航船(わたしぶね)のなきに稍(やゝ)這船(このふね)を見(み)出(いだ)し寄(よ)せよと喚(よば)ひに応(おう)ぜざれバ自(みづか)ら漕(こぎ)て渡(わた)さんと思(おも)ふよりそ蜚乗(とびの)りたる程(ほど)の難義(なんぎ)ハ俺(おれ)のミなるべきからんに岸邊(きしべ)をうちて見(み)え那里(かしこ)に立(たて)るハ是(これ)同因果(どういんぐわ)の義兄弟(ぎきやうだい)犬村大角(いぬむらだいかく)礼儀(まさのり)と喚做(よびな)す文武(ぶんぶ)の俊傑(すぐれもの)之(これ)他(かれ)も亦(また)感得(かんとく)の靈(れい)玉(たま)あり痣(あざ)もあり郷(さと)ハ某(それがし)下野(しもつけ)に旅宿(たびね)せし折(をり)邂逅(わくらば)の人ゝハ大士(だいし)の一人なるべきよしを洗(?)ふ悟(さと)りて義(ぎ)を結(むす)び又より他(かれ)ハ則(すなは)ち家(いへ)を棄(すて)所親(しんるゐ)に別(わか)れて只管(ひたすら)に和殿們(わどのばら)自餘(じよ)の大士(だいし)も環會(めぐりあは)まく思(おも)ふなるにそれより以来(このかた)某(それがし)と倶(とも)に諸国(しよこく)を徧歴(へんれき)の光陰(くわういん)二稔(ふたとせ)に及(およ)びたりと報(つぐ)れバ、鉄(?)ふ信乃(しの)道節(どうせつ)ありてハ船(ふね)を岸(きし)に寄(よ)せて犬村生(いぬむらうし)に對面(たいめん)せん吁(あな)愛(めで)たしと諸声(もろごゑ)に含笑(ゑみ)なから寿(ことぶき)祝(ほが)ひて繫索(もやひ)を解(と)き篙(さを)を抜(ぬ)きつゝ。撑(さを)さし船(ふね)を岸(きし)に寄(よ)すれバ現八(げんはち)ハ遽(にはか)に船(ふね)より出(いで)て笑(ゑみ)げに大角(だいかく)にうち對(むか)ひて犬村生(いぬむらうし)立(たち)疲(つかれ)て你(なんぢ)も倶(とも)不樂(まちびけ)かりらん既(すで)に這里(ここ)より乗(の)りし如(ごと)く某(それがし)船(ふね)よりち乗(の)りて立(たち)まちりけるハ没怪(もつけ)の福(さち)を料(はか)らずも大塚(いぬつか)犬山(いぬやま)二兄弟(ふたりきやうだい)に再會(さいくわい)するも快(こゝろよ)く對面(たいめん)あるべかりしと報(つぐ)るを大角(だいかく)うち咲(ゑみ)て其(それ)ハ歓(よろこ)ばしき事(こと)なれ。初(はじめ)和殿(わどの)が船(ふね)の内(うち)を敵(てき)と左右(さう)に引受(ひきうけ)る勝負(しようぶ)をすべて測(はか)り難(がた)く最(いと)大(だい)なる氣(き)を凾(?)しかど遠(とほ)くもあらぬ程(ほど)なれバ俺(おれ)身(み)ハ山里(やまざと)に生育(おひたち)て木枝(?)自由(じいう)ならざれバ鄙語(とつぎ)に所謂(いはゆる)隔水(?)なる闘諍(けんくわ)に似(に)たる辞(ことば)不便(ふべん)ハいふべうもあらざりしと答(こた)へも解(とけ)て和睦(わぼく)の光景(ありさま)なれバしよりも咲(ゑみ)えしからぬ喜(よろこ)びとなりるとの憑(たの)しさよと程(ほど)間(ま)に信乃(しの)道節(どうせつ)も岸(きし)に登(のぼ)りて共侶(もろとも)に身邊(みのほとり)に来(き)なるを大角(だいかく)ハ恭(うやうや)しく欸(?)く迎(むか)へて犬塚(いぬつか)犬山(いぬやま)二賢兄(けんけい)某(それがし)犬村(いぬむら)礼儀(まさのり)二兄(ふたり)のうへハ豫(かね)て犬飼生(いぬかひうし)に兼知(かねしり)して景仰(けいかう)の懐(おもひ)已(すで)に久(ひさ)し倶(とも)に諸国(しよこく)を巡(めぐ)りし甲斐(かひ)ありて今宵(こよひ)面會(めんくわい)の歓(よろこ)びを殼塵(?)をも辛(から)ひ是(これ)に優(まさ)るものなしといひてぞ信乃(しの)道節(どうせつ)も礼(れい)を返(かへ)しつ却(さて)なる犬村生(いぬむらうし)の来歴(らいれき)素(もと)より生(せい)ハいまだ詳(つまびらか)ならねども俺們(おれら)も異(こと)なる玉(たま)あり痣(あざ)もありとし呼(?)けバ亦(また)是(これ)異姓(いせい)の弟兄(きやうだい)生(うま)れし時日(ときひ)ハ同(おなじ)からで異(こと)なる郷(さと)に成長(ひととなり)たるも今(いま)しろし後(のち)憂(うれ)ひを分(わか)ち禍福(くわふく)苦楽(くらく)を共(とも)にして皆(みな)同(おな)じ御(?)同日(おなじひ)に死(し)なんと願(ねが)ふ外(ほか)に他志(たし)なし余(よ)なる犬飼(いぬかひ)共侶(もろとも)に。危窮(ききう)の厄(やく)を免(まぬか)れし這河邊(このかはべ)まで来(き)のひたるを寄(?)なるのミぞ後(のち)の安危(あんき)を具(つぶさ)にせざれバ胸安(むねやす)からぬぞあ

義と知らーのひと。同じく大角歎息して。縛の起本は俺身に在り。犬飼生の連累。その故は箇様
箇様とけの驟雨のごとく。折行裏と盗児を奪去られ。縛の趣又這河の堤に二個の賊と合
へんと。且く挑戦の程。那盗児は逃亡て。行衾さへ。ひとつ。迹なき件の盗児は近郷より
竊盗とて来ー衣箱の送りーなれかの盗児を追隊の衆人。疑はず大角と現八を。欺て穏
ひ。宿所に伴ひ。宴を設て。捕捕りの支の光景。并に襦袢の片袖。怪々のあるを。此報暗
合をこれよりの。那衣箱の主と。ものえ。穏北の郷士。永垣残二夏。がその辯論を聴て。現八と
大角を。毀る果さんとて。教圃氏と女児重戸が賢才良智の詞を盡して。諫めーるに。その堺落點
餘さ七の還り。なるまで。俟んと。現八と大角を。盆樹室に禁獄をる。黄昏時。件の童戸が資
助のよりて。脱れ出る。縛の顛末。怪々とその崖略を。説示せば。現八も亦共伯に。童戸が婦徳を賞
賛して。俺們。憶ず。寃枉に。身を危くせれども。一婦人の資助のよりて。免れ。事ふと。命を
惜まーふ。あらぬ。いで。又那盗児を。捉へて。恥を雪んと。果さまりて。間々。身を暗くして。河を。脱

して。這里まで。来つるべきの。義を猜ーぬれと。告る詞の不樂しーふ。倶は。嗟嘆の堪ざりーと。信乃道節の
つぐと。ものて。憶ず。目と目と。合して。奇なる。妙なり。犬村大飼。両兄弟の。話説。就て。又一條の。話説
ある。且。ものと。慰めて。迭代に。説示。その顛末を。原るに。這朝。信乃道節。八栗橋を。旅舎を。出て
千住堤を。来かけるに。既に。日は。昏れて。河を。立前面へ。うち渡して。千住に。宿を。投んと。航船を。索
ねーふ。航場に。船。なくて。這里に。艘。船。一。艘。あり。船。両個の。笛師。何。あるか。東西を。論
ず。云云。の程。信乃道節。喚。けられて。敬。慢。の。声。ざる。を。心。とて。来。由。を。問て。夜川。渡さ
ば。製度。自。れば。船賃。ヨく。賜らば。窮。渡ーまん。誘々。乗せ。の。船。を。撑て。寄せ。信
乃道節。遽ーく。件の。船。に。乗りーふ。笛師。彼。客人。連。を。乗せま
わーせ。人。を。れ。と。厭。前面の。岸へ。漕。寄。まで。權。且。せ。の。下に。臥て。立。昔。ものと。論
ず。信乃。心。訝。そ。密。に。道節。の。袂。を。引。て。道節。も。亦。意中。悟。て。疑。ず。然。氣。
いれ。ば。共伯。を。彼。に。横。臥。て。登。時。両個の。笛師。持。る。笛。を。引。抗。て。信乃道節。を。咽

吭を刺串んと閃めかすを、信乃は已に道節も臥つゝ等しく身を反せば寃外れて、篙師們は板子を踏鳴し
と串れなり、以あらぬその船篙の石突も、稍を製作きて鋭と鎗に異ならねバ、かくて如此利害あり既に
是て篙師們は突外せしに心慌て引抜んとせし程に、信乃道節は此ひまに透さず身を起し篙をとる
縁て此彼共に引つけて組んとする横面を撲悩し蹴倒して鎖をもて旋回巻に推雙べ、細めて流石
船を撐止め篙を建載ぬ索を擲て却件の賊篙師們を息も吻せず難撻懲し、緊しく拷問
するに、二賊は苦痛に堪ずして遂に招道するやう、小可們は宿もなく、這船にのみ起臥をす。
尻肛玉河太郎、坐宿猫野良平と喚做されて、元来筆算の癖なれバ、世渡る業に疎きを賭
銭を好き酒を嗜む。慾に底なき性なれバ、倶に悪事を宗として夜毎に這里の河辺に在る時も
墨田河にも船を繋ぎて旅客人の渡りを求るとあれバ、猝然と欺詐りて船に臥さして這篙を
突殺し盤纏を奪て屍骸を河へ投棄し、我們は番に秋任して夜川に幸き折を逆
御客人の東西を窃をしるも屢なりける。實に割終に免れず、武勇に長たる刀禰們とも知らで虎

髯を曳損ね絅められて、後悔のほぞに立よしなけれども、今より野心を改めて法師にならんとおもふのみを願ひ
慈眼視衆生の佛心を垂させて許させ給へと同音に哀請ふて已ざりしを、信乃は聞つゝ冷笑て俺
が這河邊に来つる折、若們は這船中にて頻に東西を論じて云云と云ふ声の洩聞えしを、今おもへば窃
みし東西を分ちんとぞ、その損益を論せしなるべし。さらん這義は甚麼と又貴問れて、それまで隠すべうもあらざりけり
野良平がいひけるやう、御推量に違ふことなく、件の河太郎と共侶に穂北の御士の宿所を覘ひ、背門
より窃入りし折、河太郎は逸速く其頭にありける衣笈箱をすなはち出てありけるに、小可はまず東西もな
と取らまく銭や小廝にみ出されて竹籬笆を潜りて逃去るに、却その路にて小可は旅なる武士の逆しに認
包を搔攫んとて走よりを、武士は遠くも退けて、捷菟来なる堤の頭に河太郎は衣笈箱を卸して憩ひたりし
が援を為て那武士を轂ち仆さんと挑みしかども、思ふに倍る猛者なりければ、矢庭に左右へ投伏られて、
命も倶に危かりしを、河太郎も小可もそが侭河に滾入て、辛く必死を脱れて凭る折にも、小可は又那
武士の袱包を搔攫ふて逃れども、河太郎は御措なる衣笈箱をうち捨て再会するよしもあらざりき。

是よりて河太郎が小可ぐめたる秋包の内なる金を二分ばかりとりて小可をの戯れ後に那木箱を捨てもあらばいかるべし此彼共に二分ばかりを取るんやと推辞を他亦諾ふ。憶身勝なるとなるべし那折と堤也。倘俺力を勧せぎ和郎が包を食復さえて命果敢なくなるべきなる。恨もあらばその包を留めよ俺功。然らば吾を今ゆくと云と論ぜんと。呪下過て熟と考るに是島許の誣言を四五入ぐ三ツ分よと論じ果しなるし折力の孫達の吸ひけれて口と鉗ふ又掙一掙せんとすれ胸筆用の玉が狂ひて綱の綽皆画餅なるべし。やる包が隠しと船当まあり。金と力孫達が手まらせ命を助けあれとのうせも肯き道節が眼と瞪ら一声苛立て這奴们が苦しゐ隨ふ我们を盗児の虎肉壷と呼ぶ狡かの如紀吉生が理を説人が無益人剣ふして積悪の報ひを思ひ知せんぞと敦圍怒く身を起ぎ信乃が雷妻時と推参めて今這奴们を推並て斬るが輒ち所為あれども手ぶよりも急ぬ旅なれば程遠ら村長まよりと報章渡し地方の法度が儘一点這奴ら窮まり行裏と亦その主ら送り遣ぎ綽の便目もあらんか。

性急るが要ふ必ずやらを道節諾ふ。介ら船と岸が寄せ舊来一里が走ん同是その行裏の内と検めそのそもべ然とて野良平が板子の下が隠し措る秋包を索出考らるが扱とつる折岸と離れ船ふ忽地内りと乗るのあり。信乃道節が驚ぎ亦それのらへ是野良平が河太郎が火家の左人ふべ。ふるければ吐る擬議ぜば道節ふ安く立て推捕へんせ程ふ信乃も亦古屋形の内より出て共倡ふ捕捕んと挑そる。その時明月雲ふ入り雲時朧影ふりける迭ま弟ふ折れば信乃道節がその人の現人ふ。現人也這両敵の信乃道節ふ。知で同士撃手と考ふ一ふ雲忽地ふ月と吐で光隈ふくなる。迭ま面と認得ふ。方僅再會の本意と遂て這話説ふ及ぶ然ば信乃道節が件の綽の趣と太角と現人迭も弟ふ説示ふ。怪れが疑べくもあり野良平が贓物が大村生の行裏ふ穂北の郷士が衣箱ふ縞合せ千住堤ふ卸措ふ河太郎と又呂這ふ物ふ。ふ郷宮ふ件の両賊と細る折初て見る那野良平が被な稲珍が左の片袖ふ。ふ穂北の郷士の宿所ふ送り稲珍の袖が是野良平が迭る

元物を破られて送り。大村生の片袖と。此彼暗合まつるを。郷士の疑ひ解ぎ難き及
ひけん。その所以なほあるまじか。今宵野良平河太郎と。郷士の宿所に牽ゆきて。ドレ〻宮原と
諦きぬ愉快とのたまつべ。那行裏は船を存ち。且両賊を一見して行裏を取收めの俱を穂北に送り
べ。とゝろを大角現八。雀躍去る不勝の欣ひ共に満面笑を向て額を拊掌て改め信乃道節のうち
對て。宿世の契濃く。今宵料らずも和君たち環會ぬのみならず。賊を捕捕のあひ実に偶
幸ひに誘然ふべ船に到りて俱に賊を牽立て氷垣が宿所を刺さんとのたまふ。管感て已ぬ
あり。信乃道節いまだ先を立て共倡み船をうち乗り。苦反落して舷桁を撃ぬる。野良平
と河太郎と大角現八。なほ疑ふ中に大角は先月より燭まで。燭まで果て這賊は郷士千住堀の水を潛
ぐ逃亡る。左人々でありけれ。立向ひ睨へて。ゆえれ盗見認たれはせ。俺は若々が送措ぬる衣箱
と襦袢の袖の敷を分明ゆ。わが箱の主ゆる夏紗の疑れ因れて不慮の難を及ぶ。神明
佛陀の冥助まるけん一夜も過ぬ若々をも這所を獲ぬ。是俺異姓の弟兄の賜ものを

知らぬ。やこ舞せ。ひく罵れば野良平と河太郎はうち駭ぬく仰視て。衣請んと。ひけん立ぬる膝を折
布て跪んとせ。程なく現八は亦枝寄て賊を撲地と蹴倒て怒る堪ず声高ふ。這盗見々ぬ
今ゆるゆ何ぞ。ぬんを若々が故ぞ。俺さへ氷垣を囚れて。美里のゆえに。做れぬ。冤を伸
恥を雪る因果は環の旋ぬる如く。善悪必応報あり。天罰訓慈ぬ。ぬ。の者の世
蹂躙ん。とあるに。大角急ぬ推禁めやまず。大飼生ぬる。今は為ぬ俺々が濡衣を乾ぬ時は。
るふ那憤を洩さんを。撻は要ぬ所ぬ。ぬべ。犬塚犬山両箇の理會まうち儘ぬ。ぬ。現
八有理と恐て。舊の処へ退ぬる。當時信乃道節は大角にうち對て。大村和殿の寃鬱れる行
裏は這里に存ち。快展検て受取めへとのたまつて。遽ち袱包を大角に受戴て。是ぬ一兄の賜
包の内は當用の為ぬ。中置ぬ。九両の金もあり。破替の衣もあるあり。なほ喪ふとも惜
むな足ぬ緊要ぬは一袱に藏ぬ。親の木主。いでくとのたまつも。遽く袱包を抱てそれば東
西皆あり。總て水に濡ぬるのみならず。半分は乾ぬ。當下大角は実父母親父母両家の木主を

恭しく取出て小高き処に置くに。対し合掌して涙を流し額を地に付て。某疎忽の失ありて姑くも四尊の霊位を賊人の為に汚されて。隍河水に濡されと朽ちく思召されし時の不祥とは。こゝに勸解なるも面倒なる。罪を償ふ由もなく。こゝに歎てひたすら料らぬ未見の義兄弟の資助をよそ尊き霊位を迎取ることなるに。先非を許させ給へか。弥陀仏々々と唱へ。孝義殊更発実あり。礼あり儀ある誠心。信乃道節現八と齊一感俱に稱へ。謹慎徳行ヨク泡々たる君子と。こゝに歩けば既に大角が親の木主を拜し訖て。又袱に包みて。道節が照る月に。こゝと瞻仰て。嘯大飼大村生平万言の盡しがたき。過去来の話説。迭に笑まく欲かれども。今の急務まあらば。夜いたく二更に及ぶなれば。其盗賊共を穂北の荘へ牽て。見て和殿共の與に。究尽の怨を雪ん快き准備をなすべきとて。立ち程もあらで穂北の荘なる人許ヨリ這方へ投て来る。文あり。蕉火の光見ると。四大士逆ふ佶と。那い穂北の夏行共。まうねく趕蒐来たるふたこゝにて此も騒ぐまゝの中に道節が呵々とうち笑ひてやよ大村生大飼も那奴共を何

とう思ひぬひなる。俺共水際に立迎へて。こゝを報て盗賊を牽遣す。那奴共が趕甲斐あるべ。丙又敗ぶれども然ては郷村和殿共の。こゝに解よりも聽ぎて武勇を誇る偏見のそむくまゝ返報を舒るよいまゝ足るべし。偽れば俺先立ちて那夏行がみづから来たらば箇様々々に相計ん。大村と大飼が。推續て水際に立て。徐に他共に對面の折。夏行怒て礼を及ぶ。拉ぎて懲らし。犬塚が要時の程。船を送りて好潮合まの盗賊共を牽出て。夏行主僕ふたせぬ這它の為に。徒々とその進退を説示せば。現八ちつ笑坪に入て。その説意をおもむろに快く立ちのいとこゝ。心ゆくまゝ身を起せば。信乃が笑つ。頭の毛大角が然ざるふあるべきもかなと思へども不吉といふべきさはがも。現八と共伯に進む道節が推續て。水際に下立て。不題再説。氷垣夏行が宿所なる重戸が虚仆ぬるを半晌ぬる知らで在りふ小厮夢介辟蔵ぬ。平ん駭誤して連ふ人を喚びぬ。夏行并に奴婢共を沸ぐ。ふ周章なる。大家重戸を抱起て。共に喚活け湯液を沃ぐ。療術等困ぬぬれば重戸が逆謀り如く稍甦生りおのちて。絆恁々と報る折ぬ。

女壻なりける落鮎有種并に郷高に部せられて那盗児を趕蒐て彼此へ赴る衆人も共侶に
這時かへり来にければ夏行ハ有種に郷高に捕へし盗児のなり。衣箱のなり。片袖のなり。重戸ハ胸を擂
られて死べかりしを剛才なる婦子に喚活されども盗児ハ外去なるとぞいふぞ。数囲暴く説示して俺は
那奴们ハ西南へハ走るべからず千住河をうち渡して遠く東へ赴んと欲せしも知らん河より東ハ他
領なり俺们の届ぬよりもあれバ其頭の用意なるべく安ハ遮莫夜河を渡さねバ輒く前岸へ赴る
かゝる時ハ聊後れたりとも今速に趕蒐なバ手に入ることもあるべし。饑て又進退不便なり快腹を拵
へて推續ぐ河原へ来よ先に還りし壮佼们ハ俺に續けと吩咐る怒氣盛なる火急の隊配なり
佼納戸に走入て身拵して出んとすれバ婿有種も立なから湯飯をたうべ身を固めて器械を
共侶に門外に立出る後方に從ふ血氣の壮佼方僅還りしも相加えて其隊約莫二十餘名
鋘叉桿棒などもて利器を挾み先に扙むハ篝火を掉照して河原を投て飛が如くに趕
ふ程に千住堤に近着けり。今程に道節ハ舟よりも立出て水際を距る三五反許。追隊は主

僕に声をかけて其首に来る人々は穂北の郷士と呼へる氷垣殿にあらずやと問かけて詰る夏行
有種持たる鎗を横へて歩を駐めつ伉と見て爾の和殿ハ何処の人ぞと問へバ道節阿容たる色
なく某ハ近国より荏土へ赴く逆旅の武士也甲夜に料らず這津にて両個の盗児に會しが估と
細めて責たりける那奴们苦痛に堪ずして傚ぬ悪しき又を招道あるとれよりも那奴们が乎宅の
宿所に潜入て衣箱を窃みし其折襦衣の片袖を喪ひしとのふるまでも初て具に吐きし是に聴て
貴宅へ牽のて出立なくてと告んと思ふ折から塵どもして衆人の這方を投て来しかバ是必盗児を
追隊の人々なるべしと猜して這里に立迎て縁由を示れしの事を覚ありや。耶と問れて歓
ぶ夏行有種共に莞尔とうち笑ぬ。そいはなる其則穂北の郷士氷垣残三夏行なれ実に
示談に違ことなく。吁来は左側に衣箱と葛籠て逃去る両個の盗児を生捕りて既に禁獄去
たりし。且黄昏時のこともありけん索を脱けて室を踰て又逃亡て往方を知ず程経て悟と呼べど
聊時の後れしかども他们が去向ハ這頭ならんと思ふによりて女壻共侶に多勢を倶して趕蒐なり。

陳ふ料らぬ和殿ふを知られて。這吉は左右を顧ずいと意外に歩する歡びとのふ落魄有種も。道節ふうち對ひて。某い氷垣が女壻落魄餘之七有種。之ふ盜賊ハ何処ふ在るや願ふ為ふ遁与しめたいと道節含笑て。そは勿論のこと。那盜覺を生拘りに某一個の力ふ由ず同紀の武士三名ふ。皆疋異姓の兄弟ふ。其と共ふ四名之内中二名ハ那里ふ。且他仲も對面して肩又詳ふ所ふ誘這方に先立てそは依水際ふ倡導ふ夏紀も有種も。ふ底へと応た。俱ふ堤をうち踰て既ふ水際ふ赴く程ふ從ひ来つる衆人ハ堤の下ふ聚合う。登時大角現八を夏紀ふうち對ひて。ふ氷垣老人狡某们ハ不幸ふ七疑似の惑ふ虐られて辱を受れ。ふ料らぬ今愛ふ杖ふされいで。直ふ盜覺を捕捉ん為ふ脱れ来て不思議ふ本意を遂る折ふも揃ふて光臨ふ。ふいと歡くいとハせも果ハ夏紀ハ怒る声を発て這盜覺们ハ胆太くも趕稠られてせん紀ふ。ふ火家の賊と謀合て。ふ欲る狡甘鏑ふて艱んぜと。四馬ふ鎗を打て面も掉らぬ大角ふ。胸前望て刺んとも方絶這絆の為体ふ。有種も亦三大士と強人と恩

ひしぐ此も擬議せ共伯ふ持る鎗を振回ふ。そは現八ふうち對ふ勢ひ両虎の見合る如く。當るべうもあらぬを現八も大角も驟ふ駆ふ。そは現八ふ遣錯一反喻て一上二下と術を盡ふ修煉の剽姚瞬く間ふ。且く敵を疲労ふ大角ハ既ふ腕乱て夏紀の鎗の蛭巻丁と抓て閃りと溝入る至妙の挿ふ現八も亦有種の鎗波憂哩と踏落て。透ふ共ふ引組て。又姑くハ桃ふ。かも三階松山城ふ矢村鮮ふ寺の奥義を極ふ就中緝捕ふ世ふ敵ふと稱られる犬飼大村両雄ふ捉ふ取る。ふうの為れハ既ふて夏紀ふ大角ふ組伏られ。有種ハ現八ふ膝ふ布れて呻吟のみ反復さえと挿れども。堺も勇も穴ふ所ふ捉られて。然も餓る昆茶雁鳥の羽節の下ふ野鶏ふ脆ふ。ふ。と羞ふ。ふ憤ふ堪ざりけり。徒ふ程ふ夏紀ふ。後ひ来つる衆人ハ三大士の刀も抜て。氷垣落魄堺男の烈ふ鎗ふ物ともせず海内ふ雙の胆勇武ふ藝ふ驚ふ呆れて醉る如くうち目成てあげるふ脆くも夏紀有種ふ持る鎗と打落されて。そは組伏られて。ふれハ吐嗟と再駭ふ繰て各々鍬又と両ふ。ふ群立て

八犬傳八輯卷五
廿七
文政壹歲

信乃
道節
現
犬塚
のら平
犬角
四犬武勇と頭

ヨヌ勢を憑む姦謀の力戦大家弁一咄と嘯て競蒐らんとまを真如ゑく推隔て若仁牛
糞馬洲の小人玉欽石欽も別を弩く身の程をもえくくで敵先若仁が両個の主汁
頸を撥て考へて後は推並て屠りて這里の河を埋ん然でも找む狡援る狡漫る謀ぜで後悔
せんとる且俺仁が敵ようと其首を足ぞやと林示める声百千の霹靂の頭の上を隊まるが如く耳を
貫く胆は喝ー勇士の奮激當るめ弩く進難る衆人が今爭ぐ両個の主汁斬られやちうん刺
れやちうんと思の心のいとく後れて一言半句も返しなを咸阿容々と公逡巡ー七一縮ゆそ
風の大角現八を大刀の緒左るの鮮生七夏紡と有種を豆取も繁ーく細めて水際を袴る二株汁
楊柳は數条留ーの夏紡も有種も堪ぬ然な声狂く若仁殺さが快殺せ俺仁命運を尓竭く
強人のるは死んの生前の恥身後の然辟言るる物ゑれども勇士あ弓折れ勢ぬ躬る例いせられ多
かり寃魂雷神夜叉とも做りて然を復さで休ぐやとそ蹉跎ぬつ罵ると現八と大角いの對ひ左
見右見て永垣の翁塀刀祢も怒を鎮めそとう聽ね俺仁素より害心を先度の恥を雪んと思

ふ所ようて仔細を示さぎ。ゑを戯ろふ似られども疑似の惑ひの覚ぎ。て人を寃屈を搭されば人亦
報ふる寃屈をもて善ふ善の報ひあり。悪ふ悪の報ひあり。天網疎ふして漏さぐるを。今
宵料ぬ義兄弟の資助ふようを那衣箱の盗人を捕へ耳を洗ひ目を拭ひて待ち。善
人を寃げ。ー徳を。みづから思ひ知りぬか。ー。とりひて後方をとりて信乃ハ野良平河太郎が素
合を縮つ。牽立て船より出て夏紡仁が面前へ推居てやれ夏紡仁を。這一人ハ尻肛
玉河太郎と喚ぶ。出没不測の強盗を。衢を和主の衣箱を。竊ぎて這頭の堤ふ
ちに奔て逃るハ則是這奴。又一人ハ宿猫野良平と喚ぶ。ある河太郎が手下黨を。
衢を和主の宿所の砦離笆を潜りて出んとまつる折。被る襦袢の片袖の樹枝を勝て断離
ま。ー。そが仁ふと逃亡る盗見ハ這奴。これを知ぬ。這里ふ
津を求め。折這奴仁が竊を謀りて殺を盤纏を夏紡ー。その機を猜ー生拘て敲て積
悪を責問ひる苦痛を堪ぎ仁ぐと招道より野良平が襦袢の片袖を情由も那衣箱の

ゐさへゐゆゑ知ぬ事なれども。ゐれ外のぞと思ひしに。俺二箇の義兄弟。和主の息女の資助より。脱ぎ捨て這里なまふければ。絶て久しく面會ふ素懐を遂るのみ。ゐ〻ぶ鄕高ふ這犬村の穿鑿れたり。行裏を。合復しふ欺びの折から。和主們主従が。疑似の惑のまゞ醒ぬ。偏見愚痴の心を師として。俺兄弟を趕蒐来つれば。為ま恥辱を雪んとて。故意と奴心を起さぬ。先ぬ再盗見們。みのがしてやせんと聽ねと言奚ふ説諭して。腰より出す鐵骨の扇を抗て。二賊の背を割て可ふ鞭悩。又撻悩して強盗則の如くふ今一番做ぬ悪支をのゐぬ。と責徴さまとて苦と叫ぶ河太郎も野良平も疾痛ふ堪ぬ恁々と。那衣箱のゐ。袖の又大角の行裏を。穿鑿て折のゐまでも。招道分明ゐりければ。敬馬思ふ夏ゐ有種初て夢の覚ゐ如く。今ゐて慚愧後悔の頭を撻ゐざりけ。這段ゐ長ゐまでを言ふ姑く筆を輟め。編を餐皇巻を更め第八十五回の改事を説果まを聽ねか。

里見八犬傳第八輯巻之五終